

A. 授業研究

都築 亨 酒井 炙久 原 幸宏
高須 明 田中 裕巳 北田 明子
丸山 豊 宮田 学 川田 基生

[I] 授業研究の課題について

田 中 裕 已

1. 教科の枠を超えた授業研究

中学・高校段階、とくに高校での授業研究は、ほとんど手をつけられていないと言っても過言ではない。社会科・理科においては科目が細分化され、それぞれの科目がほとんど一人ずつの教師によって担当されている本校のような小規模校においては、校内で授業研究をしようにも適当な相手が居らず、相当つっこんだ検討は期待できないし、教育内容の高度化・専門化とともにあって他教科の教師が容喙することも能力的に極めて難しい。その上、教師の教科（科目）の専門家意識が相互規制となって、自己の教科（科目）に閉じ籠らせる状況を作り出している。

本校では、前校長三枝孝弘教授が授業研究の専門家であったこと也有って、当時から“教科の枠を超えた授業研究”的芽が育ってきた。本紀要第21集に報告した“教材構成と授業における生徒の反応—中学社会科歴史学習の場合—”（都築・田中）は、その後半部で、全教師の出席する教官会議での討論の様子を記録している。“教科の枠を超えた授業研究”的最初の試みであったが、「中1の生徒でも、もって行き方によって随分深い考え方まで、一人一人では無理なのですがそれを組み合わせて行くとかなりな所までこの像がしばられて行くこと、これを非常に教えられました」（理科・戸苅）、「非常に楽しかったし、この導入は見事だ」（国語・米山）、「担任としてですか。……女子が反応して来ないという問題を感じているのですけれどね。」（数学・矢木）などと、お互いの授業観、学級経営上の諸問題にふまえた、かなり有意義な討論が行われた。しかし、授業内容の検討となると、社会科の教師同士の討論という域を突破できていなかった。授業研究グループが発足して3年目にあたる昨年に入つて、①授業案を手にして他教科の研究授業を見る

（2月～4月）、②VTRに録画した研究授業を検討しあう（6月～9月）という試みを重ねた。本校紀要第22集「A 授業研究」の序文で報じたように、グループ全員による授業の比較検討は不充分であったが、VTRによる授業研究の問題点をいくつか指摘することはできた。

2. VTRを利用したことのねらいと限界

（実例 その1）9月30日 高3C 現国語の授業（指導者 酒井為久）

短編小説三篇（島尾敏雄“春の日のかけり”，大江健三郎“鳥”，魯迅“孔乙己”）を読んだ後の授業で小説とは何かを、三篇の共通点を指摘させることによって考えさせるのが授業者のネライ。授業全体としては、「共通点は何か？」という授業者の問い合わせにもかかわらず、生徒の答えはむしろ三篇の比較・相違に目が向かれ、小説の形式への注目という授業者の期待にはなかなかたどりつかない。

検討会でとりあげられたことの一つは、教師の発問の姿勢ということであった。授業者の発問の間の取り方は実に巧みで、生徒たちの個別思考を促すだけの充分な時間が与えられている。この辺が技術の巧みさとして他教科の教師たちから指摘されたことであったが、教師の発問と生徒たちの答えとのズレから、授業計画を大胆に変更して行く柔軟性という点からみると、この授業にも問題がなかった訳ではあるまい。

（実例 その2）6月2日 高1C 地理の授業（指導者 原幸宏）

洪積台地と沖積平野の土地利用の比較が本時のネライ。授業はセンター・ワークを中心としながら、洪積台地に関する読図、関東ローム層、洪積台地の土地利用、集落立地などについての質疑応答と比較的スムーズに流れたが、最後に図暦の問題をめぐってやや混乱

があり、図暦の確認の重要性が説かれて終った。

この授業の問題点としては、教師の意外性への対応の仕方に学ぶべきものがあるが、読図技術が重視されすぎた嫌いがないか、洪積台地と沖積平野の土地利用の比較という本時のネライからみると、個別から普遍へと至る筋みちがもう少し説明されてしかるべきだったかと思われた。

さて、この二つの授業を含めて、グループ全員の授業をVTRに撮って検討会をもったことの最大の収穫は、グループのメンバーが、授業それ自体に立ち会っていなくても、放課後に全員でもって視聴することが可能になったという平凡なことである。もちろん、授業のヤマ場、問題のある部分を繰り返して見れることもVTRならではであるが、文字による授業記録では伝わって来ない授業の雰囲気を知ることも出来る。

しかし問題点がない訳ではない。今のところカメラ、マイクともに一台であるということから来る撮影視点の限定、収音能力の悪さという施設・技術上の問題は、それでも比較的容易に解決されるだろう。それに対して、次章にふれる授業研究の方法論にかかわる問題は、今後の継続的な研究の積み重ねを必要とするようと思われる。

3. これからの課題

(1) 教師の側の古い体質をどう打ち破るか

今までの授業研究の主たる場が小学校であり、中学・高校の授業研究が、日常的にはなかなか行われない原因として、中学・高校の教師にはより“教科の専門家”意識=繩張り意識があり、授業研究を①生徒理解の手段として、②教育課程全体を授業に即して理解する手段として、③自分の授業のあり方を反省する手段として、利用しようとする姿勢が乏しかったことを指摘できる。

自分の教科以外の教科の授業を見てみると、生徒の様々な顔を知ることができる。生徒個々の全体的な理解を押し進めるためには、自分の教科以外の教科における生徒を、単なる点数化された評価として知るだけではなく、どのような顔をして授業に参加しているのか、どのような発言をするのかという次元からも知つて行く必要がある。

教科の枠を超えた授業研究がより積極的に行われる必要がある理由として、教育課程全体を、学習主体である生徒の側からみる視点が教師の側に乏しいことも指摘できる。教育課程全体が教師の側で問題にされるのは、往々にして、各教科の単位数、時間配分という入れ物として過ぎず、各教科の内容、関連については、相互不干渉主義から、ほとんど問題にされることがない。教科の枠を超えた授業研究は、他教科の学習

内容と生徒の反応を同時に知ることのできる絶好の機会とも言える。

また、授業研究それ自体の最大のネライである授業分析は、個々の教師の日常的営為としての授業を対象化し、教師の授業観、教材観、生徒観を点検することになる。しかし、これらを可能にするためには、教師の側の“教科の専門家”意識を打ち破って行く必要がある。なかなか至難の道であるが授業研究を教師集団全体の体制として位置づけて行くには、まずグループから始める他はあるまい。

(2) 主体的に学習している、とは？

本グループでは、様々な授業形態を試みる中から「生徒の授業における行動の類型化」を行いうるのではないかという仮説の下に、発表学習や班学習などをとり入れた様々な授業形態を比較・検討してきた。それは、生徒の学力構成の多様化、相対的な学力低下というここ数年の本校の傾向の下で、旧来の教師中心の伝統的な授業形態では限界があるのではないか、落ちこぼしや生徒の学習意欲の喪失という問題が生じているのではないかという反省から出発し、生徒の多様性に応える多様な授業形態を作り出せないかというネライである。

発表学習や班学習を取り入れた場合、どのような生徒が際だった反応を示してくるのか、生徒集団の中にどのような流動がおこるのか、このような視点から、北田明子の“創作ダンスの指導”，丸山豊の“生徒の疑問・質問からみた歴史学習（中学）”（いずれも本校紀要第22集に収録）の一應の成果が出ているが、「生徒の授業における行動の類型化」にまでは至っていない。個々の生徒が、教科の違いによって、あるいは授業形態の違いによってどのような反応を示すのか、その原因は何なのかを明らかにして行くことをめざすのならば、今後は、より個々の生徒に密着した数教科にまたがっての研究が必要となろう。

グループのメンバーの様々な教科の授業、様々な授業形態の授業を観察し、検討しあってきた中で、常に問題になってきたことは、生徒が主体的に学習している、とはどのような時に言えるのだろうか、ということであった。

たしかに、発表学習や班学習には、外面向けの生徒たちの動きは講義的な授業より多いに決まっている。講義的な授業の中での生徒達の思考の動き、黙っている生徒たちの思考の動きは、なかなか外面向けされないだけにとらえにくいか、この個別思考の持続がなければ、そもそも授業は成立しない。教師と個々の生徒との思考のフィードバックは、授業過程に即して、あるいは授業後今まで考察の対象を拡大してみないと、VTRによる生徒の表情の観察だけからでは明らかになるまい。